

東京大学史史料室ニュース

第45号 2010・11・30

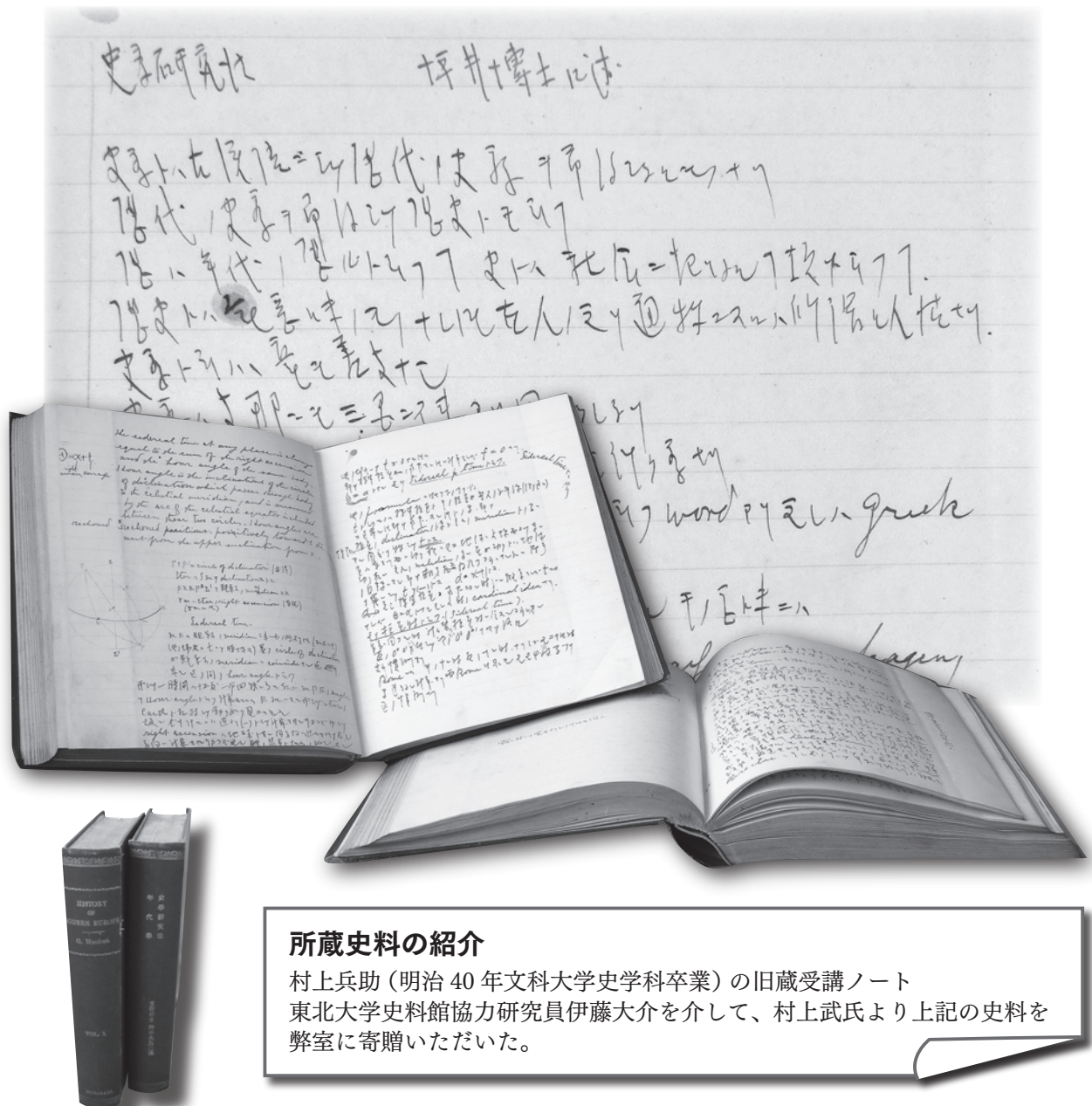
目次

駒場農学校化学教師エドワード・キンチ —終の棲家 Komaba にこめた日本への想い— 2

新制大学の学部前史をどう捉えていくか —関係する史・資料の扱いを含めて— 4

受贈図書一覧..... 6

史料室日誌抄録..... 8



所蔵史料の紹介

村上兵助（明治40年文科大学史学科卒業）の旧蔵受講ノート
 東北大学史料館協力研究員伊藤大介を介して、村上武氏より上記の史料を
 弊室に寄贈いただいた。

駒場農学校化学教師エドワード・キンチ
— 終の棲家 Komaba にこめた日本への想い —

熊澤恵里子

日本の農芸化学の発展に寄与した英人エドワード・キンチ Edward Kinch, 1848-1920 は、サリー州ヘーゼルメアにあるセント・バーソロミュー教会に隣接する墓地にひっそりと眠っている。墓碑には、こう刻まれている。

EDWARD KINCH
OF KOMABA
DIED AUGUST 6TH 1920. AGED 71
FORMERLY PROFESSOR AT THE ROYAL
AGRICULTURAL
COLLEGE CIRENCESTER AND THE IMPERIAL
UNIVERSITY. TOKIO



①キンチの墓

キンチは、明治政府が新しく開校した官立農学校の化学教師として、1876年11月30日に来日した。のちの東京帝国大学農学部の前身となる農事修学場はキンチを含む英人教師5名を得た後、駒場に移設、農学校と改称し、1878年1月24日に天皇を迎え盛大な開校式を行っている。日本の高等教育における農業教育は、近代的化学分析に基づいた農学研究と農場における実践的研究という「研究と実践」を兼ね備えた英国流でスタートした。

キンチは、日本の高等農業教育に、初めて農芸化学を導入した人といえよう。しかし、英人教師も1881年にはドイツ人教師へ取って替わられる。英人教師1名は契約途中で解雇、他2名は契約終了により帰国、1名は契約更新再雇用となった。キンチの3年契約は1年延長され、1880年11月にはさらにもう1年延長されたが、英国王立農学校 *The Royal Agricultural College, Cirencester* (RAC) の化学教授就任のため、1881年4月1日に帰国した。1913年7月15日に農学博士会の議決により、日本の文部大臣からキンチへ農学博士の学位が授与されたことから、農芸化学を初めて日本に紹介した彼の貢献度の高さがうかがえる。また、キンチの墓碑に刻まれた言葉を辿ると、30歳で来日した彼が、いかに駒場農学校とその学生たちを愛したかが切々と伝わってくる。

キンチは RAC を定年退職する3年前の1912年2月、文化人村としても有名であったヘーゼルメアの高台にある閑静な住宅街、ダービーロードに家を購入した。この家はサニーサイド *Sunnyside* と呼ばれていたが、キンチがコマバ *Komaba* と命名した。登記簿(1)には、“1916 *This house is now known as 'Komaba'*” と記されている。*Komaba* にはリクリエーションルーム2部屋、ベッドルーム4部屋、テニスコートやテラス、大きな庭があった。家の造りは、かつてキンチがサイレンセスターで住んだ家、ザ・リーズ *The Leases* と似ており、家のすぐ近くに教会と教会立の学校があるところも、また同様であった。



②キンチの家 *Komaba* (写真は2004年、Daybrookの取り壊し前)

キンチは RAC を定年退職する1915年まで、サイレンセスターの町の中心から歩いて10分ほどのビクトリア・ロードにある家、*The Leases* で暮らした。1880年に建てられたこの家はその後リノベーションを繰り返しながらも維持され、現在 B&B になっている。

RAC で化学教授として着実に実績を積んでいたキンチは1889年4月24日、ウェールズ地方テンビーの司祭ジョージ・ハンティントン *George Huntington* の娘エディス・シャーリー *Edith Shirley* と結婚した。しかし翌1890年1月29日、エディスを33歳という若さで亡くしている。その後キンチは生涯独身を通したが、晩年を過ごした *Komaba* ではメイドたちの他に、エディスの姪たちが一緒に住んでいたようである。*Komaba* はキンチの死後売却され、デイブルック *Daybrook* と名を変えたが、広い庭とテニスコートなど、家の外観はほぼそのまま残された。

残念ながら、*Komaba* は2005年に市の住宅建設計画により取り壊されてしまったが、その痕跡はキンチの死後90年もの間、しっかりと消えることなく、墓碑に残されていたのである。ただ、キンチが終の棲家につけた *Komaba* という名の由来は、今となっては誰も知

るよしがなかった。

キンチは、1848年8月19日にオックスフォードシャー州ヘンリーオンテムズ町の中心で雑貨店を営む父チャールズと母エマの三男として生まれた。1851年の国勢調査によると、一家は薬品や雑貨、本などを扱う店の共同経営者であった父35歳、母27歳、長男チャールズJr 5歳、次男ウィリアムズ3歳、三男エドワード2歳に加え、薬剤師1名とメイド1名という構成であった。父チャールズは、薬局や本屋 *Chemist, druggist, bookseller* の他に印刷や郵便、保険代理店など、数多くの商売免許を保有していた。1859年にチャールズが40代半ばで亡くなった後、妻エマが夫の残した多くの商売を引き継いだ。このような環境が、キンチを化学の世界へいざなったのかもしれない。キンチの生家は、現在は婦人服店と肉店に姿を変えているが、建物の外観には昔の面影が残されている。

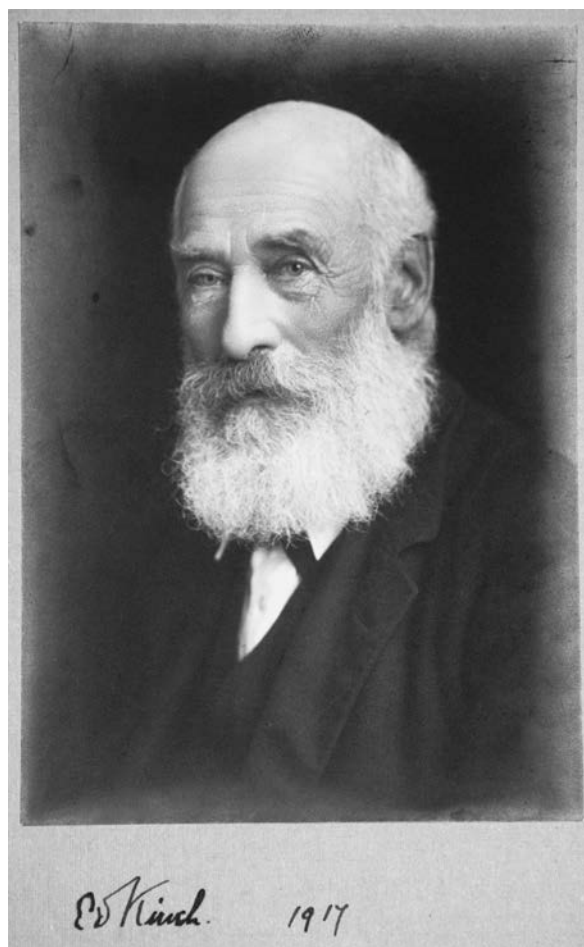
キンチ死去の追悼記事によれば、キンチはヘンリーオンテムズのグラマースクールを経て、王立化学学校 *Royal College of Chemistry* に進んだ後、実験助手に採用された。20歳以後の職歴は *RAC* の名簿にも記載されており、*RAC* 化学教授チーフアシスタント (1869-1873)、サウスケンジントン王立化学学校 *Royal College of Chemistry and School of Science* 実験助手 (1871-1875)、インド博物館 *India Museum, London* 鉱物管理責任者 (1875-1876)、と一貫して化学実験・分析研究の道を歩んでいる。

キンチの化学分析に対する熱意と勤勉さは、日本行きにも現れている。キンチの友人ワーリントンがローザムステッド試験場のギルバートに宛てた1876年7月10日付書簡に、「先週キンチ氏と会いましたが、日本に行く前にローザムステッドの実験をみたいと言っています」とあり、日本へは、最新の化学分析実験技術と研究を伴っての来日だったことがわかる(2)。かくして、30歳のキンチは1876年11月30日に日本へ到着したのである。

駒場農学校における英人教師らによる教授・研究方法については、生徒の回顧談に「日本の実情に適していなかった」「英国流をすべて移植しようとした」などの批判もあり、キンチもその例外ではない。しかしそれ以上に、キンチの教養ある人柄と熱心な指導は、生徒から慕われていたことは想像に難くない。キンチが帰国後、*RAC* 在職中の1881年6月から1915年の間に、駒場農学校卒業生からは澤野淳、酒匂常明、渡邊朔、大内健、新山莊輔、一条基治、三成一郎、長岡宗好、須藤義右衛門ら、そうそうたるメンバーが来訪している。1914年、札幌農学校1期生で後に東北大学農科大学長、北海道大学長を歴任した佐藤昌介まで、計32名の日本人がビジターズブックに署名している(3)。1892年に日本で最初の農事試験場長となった澤野淳は、1889年6月28日に老農林遠里らを伴い *RAC* を訪れている。

2009年12月、キンチの足跡を辿る私の旅の終着点で彼の眠る墓地であったことは、感慨深い。墓全体を包み込んだ深い苔を拭き去った後に浮かび出た *KOMABA*、そして *IMPERIAL UNIVERSITY.TOKIO* の文字に、いいようのない感動を覚えた。キンチの墓

碑に刻まれた *Komaba* には若き日への憧憬が、そして *IMPERIAL UNIVERSITY.TOKIO* には研究者・教育者として追い求めた希望が込められていたに違いない(4)。



③ Professor Edward Kinch (*RAC* 退職後)

(注)

- (1) *Heslemere Educational Museum's Library and Archives, UK* 所蔵。
- (2) *Rothamsted Research Archives, UK* 所蔵。
- (3) *The Royal Agricultural College Library, UK* 所蔵。
- (4) 詳細は拙稿参照。Kumazawa, Eriko (2010) 'Edward Kinch (1848-1920) Professor of Agricultural Chemistry at Komaba Agricultural College in Meiji Japan', in *Britain&Japan:Biographical Portraits, vol.7, England, Global Oriental, pp.354-70.*

写真所蔵先

- ①キンチの墓
著者撮影 (2009年12月17日)。Derby Road Cemetery
- ②キンチの家 *Komaba*
所蔵：Heslemere Educational Museum's Library and Archives
- ③ Professor Edward Kinch (1917)
所蔵：The Royal Agricultural College, Library

(くまざわ えりこ：東京農業大学 教職・学術情報課程)

新制大学の学部前史をどう捉えていくか — 関係する史・資料の扱いを含めて —

谷本 宗生

筆者（谷本）は、所属する東京大学教育学部の創立六十周年事業で、六十年史の編さん作業に本年度急きょ関与することとなった。戦後になって、1949（昭和24）年5月に新制国立大学東京大学の教育学部は生れたが、それ以前の「前史」（教育学科史）を教育学部史としてどう捉えていくかは重要な問題であろう。実は、戦後CI&E側と旧帝国大学側は、教育学部の設置をめぐる意見をばげしく交わす一幕もあった。当時東京大学の総長をつとめていた南原繁としては、すでに東京大学では文学部内に教育学科を有しているのだから、それを時間かけて発展充実させていき、将来的には独立した学部昇格させたいと表明していたのである。

教育学部40周年の記念シンポジウムでは、学部長をつとめていた堀尾輝久が次のような「教育学部40年の歩みと展望」といった基調講演を行っている。そのなかで、「この学部への期待を考えると、戦前の教育及び教育学というものが国家目的に従属し、それに奉仕したものであったということへの深い反省がこめられていた、と私には思えます。もう少し具体的にいうと、一つには、戦前の教育学は目的は問わない、あるいはその前提を問わずに、教育的な方法、あるいは教授技術論として議論されてきた経緯がある。…もう一つは、これは総合大学、戦前の総合大学で講じられた教育学への反省と違ってよかろうと思うんですけども、この、全体としては、そこでもやはり、国家目的に従属するという規定から免れてはいないんですけども、しかし、この戦前の、例えば、東京大学などでは、外国の学説が好んで紹介される、しかし、いってみればそれは、講壇教育学あるいはスコラ的な教育学にとどまっているわけで、それが、現実の教育、実際の教育とはかかわらない、という性格といいますか、特徴もっていたわけで、それではいけない、こんごの教育学はまさに、現実の教育実践と切り結び、それを批判を通して前進させる、そういう批判的実践的な教育学にならなければならない、そういう課題意識をこの戦後改革期を通して、教育学自らが目覚めているのだと私は思います。」（『教育学部創設四十周年記念シンポジウム 講演およびシンポジウム記録』1990年、2～3頁）と、戦後教育改革における教育学部設置の意味合いを強調している。戦後以降の教育学の考え方、教育学部としての志向については容易に

理解できるが、学部前史をどう捉えるのかはいまだ評価が分れるところであろう。筆者が強調したいのは、評価の違いをこえて学部前史も大学史の一環として捉え、教育学科及び教育学部に関係する史・資料を継続的に整理・保存していく姿勢がまず必要ではないかということである。

一例で恐縮であるが、学部前史のなかで旧軍部と帝大教育学との制度的なかわりが問題視されよう。軍将校の派遣学生らが一定期間、帝国大学の授業を聴講していた。国防国家としての要請を強調した陸軍大尉鈴木庫三も、1930～1933年に文学部への陸軍派遣学生として、教育学を熱心に学んでいたとされる。派遣学生終了後の1936年には『軍隊教育学概論』を執筆したが、その序文で教育の科学を提唱する阿部重孝は、次のように述べている。「鈴木君の東京帝大文学部に於ける三年の生活は、真に真剣な研究生活であつた。私は君の研究生活に対して貢献する所があつたとは考へないが、無遠慮に、素直に、君と教育を語合つた多くの愉快的思出をもつてゐる。君が三年の研究生活を終つて原隊に帰られるに際して、君に軍隊教育学の建設をすすめた者の一人は私であつた。」。陸軍の鈴木に限らず、陸軍海軍ともに帝国大学側に定期的に聴講生を派遣していたのである。それは、現在も東京大学に残る『官庁往復』といった公文書記録をみてもよく分るところである。「…追テ砲兵大尉内山雄二郎ハ昭和二年四月ヨリ本年三月迄文学部ニ於テ教育学科聴講中ノ處本年四月ヨリ更ニ一箇年間聴講ヲ継続致サセ度ニ付可然御取計相煩ハシ度申添フ…」（陸軍次官「現役陸軍将校四名本学聴講方ノ件」『官庁往復』1930年）。このような戦前・戦時の帝国大学における教育・研究体制については、筆者（谷本）は紙面上の制約などがある『教育学部六十年史』（2011年刊行予定）とは別に、東北大の若手科学史研究者らと科研費共同研究「戦時下の帝国大学における研究体制の形成過程とその実態に関する研究」（基盤研究C）で、これから実証的に明らかにしていきたいと考えている。

今回の『教育学部六十年史』（2011年）では、『東京大学百年史』（部局史一、1986年）の「教育学部」の記述を、通史的に参考とする基本方針が確認された。百年史では、教育学部の記述は「教育学部前史—文学部教育学科—」「教育学部通史」「教育学部各

学科・教育史コース「附属高等学校・中学校」から構成されている。今回の六十年史では、百年史などの記述を踏まえて「教育学部沿革史」「専攻／学科・コースの変遷」「附属学校・附属施設の変遷」「寄稿」「資料編」から構成するとした。六十年史の「沿革史」でも、「教育学部前史」を百年史同様に、そのまま構成上継承している。百年史の際に、教育学部史の編さんに従事した仲新の関係文書については、土方苑子・仲文書調査会が整理・目録化して、その一端を発表している（「仲新氏所蔵東京大学文学部教育学科／教育学部関係文書 教育学部創設文書を中心に」『東京大学大学院教育学研究科紀要』39、1999年）。仲の関係文書によって、戦後の教育学部創設時に36講座案をはじめとして、さまざまな学科講座案が模索検討されていたことなどが判明した。いっぽう、学部前史にあたる文学部教育学科の推移については、百年史の編さん作業以降、関係する史・資料の収集や整理はあまり進んでいない。講座や学科のシラバスや担当教員の変遷については、文学部の学生便覧などから容易に抜粋可能であるが、当時の教育・研究活動の実態について、関係する史・資料は具体的にどこか？という認識からまず始めなければならないであろう。

吉田熊次が専任教官として着任して以降に設けられた教育学研究室の主な活動は、1908年から開催された教育学談話会、1919年の教育学科の設置にともない開始された調査活動及び内外の教育雑誌講読会、そして1927年から始まる研究室の研究発表を掲載した教育学専門誌『教育思潮研究』の刊行などがある。『教育思潮研究』をはじめとして、『中等教育の比較研究』（1921年）『小月小学校外三校学校調査』（1922年）『教員養成制度の調査』（1923年）『最近欧米教育思潮』（1921～1923年）などは、現在も教育学部図書室に所蔵されており、一般に閲覧利用が可能である。重要と思われるのは、当時講座を担当していた各教員らの研究・教育活動をどのように把握しておくかである。最近では、学術コンテンツ・ポータルで国立情報学研究所のGeNiiといったデータベース類が充実してきており、たとえば「吉田熊次」と入力検索してみると、関係論文41件、関係文献224件などと容易に列挙され、教員の主だった学術情報が入手可能である。今後、この種の学術データベースはよりその範囲や精度を高めていくことが期待される。ただし、当時の教員らの教育活動やそれらの情報については、先の研究情報と比べると入手がむずかしいといえよう。

そこで、当時の文学部学友会が継続的に編集発行した学友会会報誌（東京大学総合図書館所蔵）が注目される。その会報誌のなかで、「雑報」として「研

究室報告」や「卒業論文題目」が毎号掲載されている。たとえば、『会誌』17号（1943年6月）の「教育学研究室」では、次のように記されている。少し長くなるが、当時の研究室内の状況が示されているので引用したい。「教育の研究はいよいよ重要性を加へて来て、研究室の人々もそれぞれ活躍を続けてゐる。このところ、病氣らしい病氣をするものもなく、全員異常なしといふ状態である。唯周郷助手が昨年末に、比島調査委員会の補助委員として転出されたので、いささか淋しい感じがする。周郷助手の和氣霽々たるところは学生との接触の上にも、よい功績を残した。われわれも、この研究室の風を永く続けてゆきたいと思ふ。併し、どういふものか、この頃の学生は昔の様に研究室に集つて駄弁ることが少なくなつて来た。ここ二三年の学生はこの傾向をますます強くしてゐる様で、残念に思はれる。教育雑誌研究会に出席する者の率が悪くなつたのも、単に岡野の菓子になつたためばかりとはいへない様である。先生方の家をお尋ねして、雑談に耽りつつ、有益な指導を受けるといふことも減つてゐる。講義によく出席したり、軍事教練も欠かさなつたり、単位を余計にとつたりする様になつたことは、喜ばしい。然し大学の学生生活といふのは、そればかりではない。皆で集つて、思ふ事を語り合ひ、教育学の将来の建設を論じ、国家百年の理想を樹ててこそ、真の教育学徒たることができるのである。志を同じくして入学したものが、半年もたつて、クラス会でもつくつたらどうかと研究室から催促される様では情ない。薄暗い研究室にも、この頃になつてやつと暖い風が入る様になつて来た。心持よい初夏の頃を迎へるのもぢき[ママ]である。談話会に出てももう寒くはなくなる。ピクニック等の催しもあることであらう。皆揃つて顔を見せて、楽しく語り合ひたいものである。（吉田記）」。

さらに、授業にあたっての講義ノートや受講ノート類の収集・整理も着実に進めておかなければならないであろう。原史料の適切な保存に加え、それらのデータの円滑な活用のためには画像スキャン化も同時に行つておく必要がある。デジタルカメラやスキャナーを用いれば、その種の作業も意外に容易なものと思われる。学部前史にあたるノート類と、教育学部創設以降のノート類とを比較検証することも期待できる。たとえば、同じ開講課目の「教育学概論」でも内容的にどう違いがみられるのかなど、旧制大学と新制大学との教育力の比較検証といった壮大な研究が生れてくる可能性もある。大学の教師力、教育力は昨今注目されているが、まさに古くて新しい現代的なテーマになるかもしれない。

（たにもと むねお：大学史史料室）

受贈図書一覧（抄）（平成22年2月～平成22年7月）

大学アーカイブズ No.42 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会	平成22年3月	慶應義塾福澤研究センター通信 第12号 慶應義塾福澤研究センター	平成22年3月
立命館大学国際平和ミュージアムだより VOL.17-3 立命館大学国際平和ミュージアム	平成22年3月	ぎんなん No.102 谷本宗生	平成22年2月
関東教育学会会報 No.45 谷本宗生	平成22年4月	佐佐木信綱記念館だより 第24号 佐佐木信綱記念館	平成22年3月
関東学院学院史資料室ニュース・レター 第13号 関東学院学院史資料室	平成22年3月	緑丘アーカイブズ 第11号 小樽商科大学百年史編纂室	平成22年3月
金沢大学資料館だより 第34号 金沢大学資料館	平成22年3月	神戸大学百年史 通史Ⅱ[新制神戸大学史] 神戸大学百年史編集委員会	平成22年3月
東北大学史料館だより 第12号 東北大学学術資源研究公開センター史料館	平成22年3月	資料でみる日本大学の120年 日本大学資料館設置準備室	平成22年3月
大学史資料室ニュース 第14号 大阪市立大学大学史資料室	平成22年3月	稿本神陵史 大学予科編 (財)三高自昭会三高記念室	平成22年3月
名古屋大学大学文書資料室ニュース 第27号 名古屋大学大学文書資料室	平成22年3月	東海大学学園史ニュース No.4 東海大学学園史資料センター	平成21年12月
東北大学百年史編纂室ニュース 第15号 東北大学百年史編纂室	平成22年3月	大東文化歴史資料館だより 第8号 谷本宗生	平成22年5月
京都大学大学文書館だより 第18号 京都大学大学文書館	平成22年4月	大阪大学文書館設置準備室だより 第6号 大阪大学文書館設置準備室	平成22年3月
教育史学会 会報 No.107 谷本宗生	平成22年5月	THE SPIRIT OF MISSIONS立教関係記事集成<抄訳付> 第2巻 立教学院史資料センター	平成22年3月
東京大学教育学部 教育学研究科案内 2010 谷本宗生		青山学院資料センターだより 2号 谷本宗生	平成22年7月
国文研ニュース No.19 人間文化研究機構 国文学研究資料館	平成22年4月	金澤高等師範学校附属中学校の記録 改訂増補版 1944-1952 谷本宗生	平成19年12月, 平成21年4月
徳川記念財団会報 第15号 (財)徳川記念財団	平成22年6月	桃山学院創立125周年記念誌 桃山学院創立125周年・大学開学50周年記念事業事務局	平成21年9月
拓殖大学百年史 明治編 拓殖大学創立百年史編纂室	平成22年3月	戦争と明治大学-明治大学の学学徒出陣・学徒勤労動員- 明治大学総務部総務課大学史資料センター	平成22年3月

柏原英一書簡集 梅溪昇	平成22年 3月	日本教育史往来 No.184～No.186 谷本宗生	平成22年 2月～6月
記録を守り 記憶を伝える-学習院大学大学院アーカイブズ学専攻開設記念誌- 学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻	平成22年 3月	大学史研究通信 第61号,第62号 谷本宗生	平成22年 2月, 5月
公立大学の誕生 財団法人名古屋大学出版会気付吉川卓治	平成22年 7月	勸学院の雀 第168号～第172号 谷本宗生	平成22年 1月～7月
TEXNH MAKPA 第1号 女子美術大学歴史資料室	平成22年 6月	地教史学通信 第116号～第118号 谷本宗生	平成22年 3月～7月
記念館だより 第4号 わだつみのこえ記念館	平成22年 7月	1880年代教育史研究会ニューズレター 第28号～第30号 谷本宗生・金沢大学資料館	平成22年 1月～7月
<学位論文>東京工業大学における戦後大学改革に関する歴史的研究 谷本宗生	平成17年 2月	東北大学百年史 三 通史三,九 資料二, 正誤表 東北大学百年史編纂室	平成22年 2月, 3月
小樽商科大学史紀要 第4号 小樽商科大学百年史編纂室	平成22年 2月	ニューズレター明治大学史 vol. 7, vol. 8 明治大学史資料センター	平成22年 3月
金沢大学資料館紀要 第5号 谷本宗生・金沢大学資料館	平成22年 3月	成蹊学園年表(稿本5)1989(平成元)年4月～1999(平成11)年3月 ⑦ 谷本宗生	平成22年 3月
米国人文科学顧問団記録 第18輯 九州大学大学文書館	平成22年 3月	成蹊学園年表(稿本6)1999(平成11)年4月～2009(平成21)年11月 ⑧ 谷本宗生	平成22年 3月
『大学紛争関係資料』I～V解説・目録 二〇一〇年三月 京都大学大学文書館	平成22年 3月	東北学院資料室 vol. 9, 展示録 2010 東北学院	平成22年 4月
同窓会通信 第2～3号 一高同窓会	平成22年 4月, 7月	<翻刻>南鷹次郎講義「園芸学」(平塚直治受講ノート)上, 下 北海道大学大学文書館	平成21年 3月, 平成22年 3月
江戸東京博物館NEWS vol.69,vol.70 東京都江戸東京博物館	平成22年 3月, 6月	地方史研究 第三四三号～第三四六号 谷本宗生	平成22年 2月～8月
記念館だより 第50号,第51号 谷本宗生	平成22年 3月, 6月	アーカイブズ 第39号, 第40号 独立行政法人国立公文書館	平成22年 3月, 6月
九州大学大学文書館ニュース 第33号, 第34号 九州大学大学文書館	平成21年 9月, 平成22年 3月	青淵 三月号(第七三二号)～八月号(第七三七号) (財) 渋沢栄一記念財団	平成22年 3月～8月
かわら版 第281号～第286号 谷本宗生	平成22年 1月～6月		

史料室日誌抄録（平成 22 年 2 月～平成 22 年 7 月）

- 2月24日（水） 山口・柏木室員、東大・柏キャンパスの視察見学。
3月1日（月） 谷本室員、中野実文庫の箱詰め作業完了。
3月3日（水） 高橋進室長逝去。
3月10日（水） 大東文化大学荒井明夫ゼミ見学のため来室。
3月14日（日） 文京区・伝通院にて高橋進室長お別れの会。
3月17日（水） 谷本室員、夏期セミナー打合せ出席（松本・旧制高校記念館にて）。
3月20日（土）～3月23日（火）
『東京大学史史料室ニュース』第44号刊行、発送。
『東京大学史紀要』第28号刊行、発送。
3月31日（水） 東京大学の史料保存に関する委員会、廃止。
事務補佐員、柏木恵美退職。
4月1日（木） 事務補佐員、村上こずえ採用。
4月28日（水） 谷本室員、教育学部助教会出席。
5月17日（月） 防衛大学校教職員（3名）、史料室視察のため来室。
5月30日（日） 谷本室員、科研費・1880年代教育史研究会参加（高円寺）。
5月31日（月） 谷本室員、科研費・戦時下の帝国大学研究体制の打合せ出席。
6月9日（水） 『学内往復』他の中性紙箱詰め整理作業完了。
6月10日（木） 谷本室員、教育学部60年史編纂打合せ出席。
6月14日（月） 谷本室員、教育学部60年史編纂打合せ出席。
7月11日（日） 谷本室員、1880年代教育史研究会参加（高円寺）

この間の閲覧者数

学内者 2名
学外者 10名

主な学外閲覧者所属機関

立教大学、中央農業総合研究センター、金沢学院、中京大学、日本学術振興会、
東京芸術大学大学院、東北大学史料館、京都大学

その他

文献撮影・複写許可件数 6件
調査（照会）件数 64件

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第45号

発行日：2010年11月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077(直)

印刷所：株式会社 ワーナー

Archives Section of the University of Tokyo

千葉県稲毛区六方町13-2